

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：11201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652012

研究課題名(和文)「義経北行伝説」の思想史的研究

研究課題名(英文)The history of thought on "Yoshitsune hokko densetsu"

研究代表者

中村 一基 (NAKAMURA, Kazumoto)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20133895

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、源義経が平泉を脱出し蝦夷が島に渡り、蝦夷の王となり、さらに義経大明神として祀られたという《義経北行伝説》は、国境を越え他民族の歴史と自己同一化することを可能とした伝説であることを明確にした。さらに、《義経＝ジンギスカン》説は、アジア民族意識と深く関わることで、「大東亜共栄圏」の思想と深く結びつき、これを唱えた牧師小谷部全一郎の説は、東洋から「世界統一の君主」の出現を期待する《宮地神道》の思想と、その道を「天祐霊導」、「義経の霊」が導くという《霊学》的確信とが融合した《大アジア主義》であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In the present study, "Yoshitsune hokko densetsu" was to clarify that it is a legend that was it possible to history and self-identity of the other ethnic groups across the border. In addition, "Yoshitsune = Genghis Khan" theory, by deeply involved in Asia ethnic consciousness, showed that it was deeply connected with the idea of "Greater East Asia Co-Prospersity Sphere." Plus, I conclude that Itsuo Miyaji's theory that from eastern Asia there appears the king of the world and an occult idea that the spirit of Yoshitsune = Genghis Khan would guide Japanese people are Zenichiro Oyabe's higher principle of racial wars.

研究分野：哲学・思想史

 キーワード：義経北行伝説 義経＝ジンギスカン 末松謙澄 小谷部全一郎 黄禍・白禍 大アジア主義 霊学 日
猶同祖論

1. 研究開始当初の背景

(1) 「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成 寧波を焦点とする学際的創生」(平成17年度～21年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究。領域代表小島毅)プロジェクトにおいて「東アジアにおける死と生の景観」班(研究代表者藪敏裕)に属し、中尊寺金色堂の「御遺体」の思想的意味を考察(「金色堂<御遺体>と浄土都市の思想」『アジア遊学 特集東アジアの平泉』102号、2007)、「愛欲の骸骨・信仰の白骨」(日本思想史懇話会編『季刊日本思想史 特集靈魂観の変遷』73号、2008)としてまとめた。平泉研究の契機となった研究であった。(2) 「平泉研究拠点形成」(岩手大学、2011)に「平泉研究」分担者として参加、「平泉・奥州にとって義経伝説とは何だったのか」を研究の柱とした。「東北文学の研究」「義経記成長の時代」(柳田國男)の発展的研究として、『義経記』と異本『義経記』の解明を担当することになったことが、本研究の第一の背景・動機である。

(3) 大正末から昭和初期の《義経北行伝説》の提唱者小谷部全一郎の「実地踏査」重視の態度に、小谷部と同郷の国学者平田篤胤の<事実>重視の態度との共通性を感じたことが、本研究で平田国学と、その玄学面を継承した宮地神道との関連を、もう一つの研究の柱とした第二の背景・動機である。

(4) 本研究に関連する研究動向としては、関幸彦『蘇える中世の英雄たち～「武威の来歴」を問う～』(中公新書、1998)、金時徳『異国征伐戦記～韓半島・琉球列島・蝦夷地～』(笠間書院、2010)があり、研究開始時点の学術的背景として参考となった。

2. 研究の目的

(1) 「義経北国下り」「衣川の合戦」など、『義経記』の奥州の義経伝説に限定して奥州方言で語られたという「奥浄瑠璃」判官物と、南部・津軽の義経北行伝説との比較交渉を行うことで、奥州「義経語り」の特色を明らかにして、奥州独自の義経像の可能性を探る。

(2) 江戸時代に、平泉脱出と北への逃亡を描く異本『義経記』が登場する。奥州では奥州本「義経記」、「奥浄瑠璃」が方言で語られる。本研究では、奥州では逃避行であったが、海峡を渡る義経は、逃避行から源氏の征夷大将軍の風格を備え始め、蝦夷が島(北海道)では渡来する王となり、さらに降臨するカミとして祀られることに、『聖徳太子伝図会』の「聖徳太子入夷譚」との類型から、日本人の異国観形成史を明らかにする。

(3) 満州の義経が、中国王朝の清・元の先祖に見立てられることなどから、『義経北行伝説』が《判官鼻眞》と《王権》とが一体化した英雄伝説であることを解明する。

(4) 江戸時代後半から幕末にかけて、『義経北行伝説』が、南下するロシアに対し、北海道・満州の潜在的な主権を主張する伝説であ

ったことを解明することを目的とする。

(5) 昭和初期、牧師小谷部全一郎が『成吉思汗は義経なり』を強く唱えた背景に、アイヌ教育に携わった後、印度・中国の神話を、日本神話の訛伝とした平田国学を学んだ経歴が強く働いていることを解明することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 異本『義経記』を収集、さらに、奥州本「義経記」、「奥浄瑠璃」判官物入手して解読する。《義経北行伝説》の登場で、『義経記』に起こった変容の比較を行う。関連して、『聖徳太子伝図会』にみる「聖徳太子入夷譚」と、『義経北行伝説』のなかの「義経入夷譚」との比較を行い、『貴種入夷譚』の類型を解明する。さらに、義経が蝦夷島の王となる《蝦夷王義経伝説》、中国における《元・清の始祖伝説》の思想史的意味について研究する。

(2) 「清悦物語」等の実見証言・シャクシャクインの反乱を中心とした蝦夷反乱記録・松前巡検使の現地報告・漂流記・『快風丸涉海紀事』(水戸藩の快風丸の蝦夷地探検記録)等の探検記録を収集し、近世の蝦夷観と《蝦夷が島の義経》像の相関関係を解明する。

(3) 小谷部全一郎の国学院大学、皇典講究所、神宮奉斎会の講師時代について調べ、『平田神道』の玄学面を継承した《宮地神道》の影響について研究する。

4. 研究成果

(1) 御伽草子「御曹司島渡り」、奥州本「義経記」、「奥浄瑠璃」判官物と、義経が平泉を脱出したことを描く異本『義経記』と、「清悦物語」「鬼三太残齡記」との比較を行い、「義経の首の真偽」「身代わり」伝説、「残夢」という人物など、平泉周辺での義経生存伝説の発生に関わる伝説と、江戸時代始めに出版された『義経知緒記』などの異本『義経記』に現れた、蝦夷が島に渡り、蝦夷の王となり、さらに蝦夷の神オキクルミとの習合による「義経大明神」として祀られたという伝説が、強く連携していくなかで、『義経記』本来の義経高館での最期が、義経自殺説が奥州に浸透して行っている。舞の本「高館」・奥浄瑠璃「高館」ともに、義経主従の壮烈な死を悼む。そこに鎮魂の感情が働いている。《判官鼻眞》の感情は、哀れさを前提とした奥州貴種流離譚の範囲を浮かび上がらせている。このように悲劇の義経の魂を鎮める一方で、せめぎ合うように、異本『義経記』が出版されていった事態が明確となった。すなわち、義経伝説は悲劇性に重点を置いた《判官鼻眞》の流れと、英雄伝説として、源氏であるが故の《征夷》の宿命を担う義経と、反逆的な義経像が併存した事態こそ、この伝説の奥深さがあると結論づけた。

(2) さらに、伊達藩事業としての高館義経堂再建や、伊達藩儒佐久間洞蔵・儒医相原友

直たちの『吾妻鑑』説重視して、義経蝦夷渡批判、義経墳墓・位牌の存在など、平泉周辺の古老の説を支持、地域伝承を重んずる姿勢に、明確に義経の靈魂の管理者としての自覚を読みとることが出来る。それは、義経を護ろうとする心情と儒者としての知性ととのぎりぎりの姿勢であると結論づけた。

(3)《知識人の判官鼻肩》と《民衆の判官鼻肩》との違いが、「歴史」重視と「伝説」重視との違いとは言えないのが、林羅山・鷲峰編『本朝通鑑』『続本朝通鑑』や、徳川光圀・水戸藩史局藩儒編『大日本史』などの官撰史書と異なり、『前太平記』『前々太平記』のような《稗史》《野史》のなかで、史実と伝説の狭間から、中世の英雄たちが蘇えり、史実と虚構が混然一体化した《偽史》において復活していることが明確となった。

(4)《義経北行伝説》は、<異域>を自覚させる伝説であり、辺境の《境界権力》を鮮明化する伝説であろう。奥州藤原氏は平安末期の《境界権力》者であった。英雄不死伝説の義経は、日本的な華夷秩序を逆転したところの、東北の《境界権力》の神話世界と連なり、さらに蝦夷神話との習合を背景に、蝦夷の王となり、神となる伝説へと連なって行くのである。その伝説を語ったのは、海峡を渡る義経一党を語ったのは、神となった義経を語ったのは、奥州藤原氏の残党「渡り党」であり、安藤(東)氏を中心とする和人集団の語り部というのは、状況証拠による見えない糸を手繰り寄せた結論である。

(5)《義経北行伝説》とは、膨張する《判官鼻肩》と越境する《異国意識》との連携意識のもとに、国境を越え他民族の歴史と自己同一化することを可能とした伝説であることが明確となった。義経入夷説は、蝦夷地の直轄地化を考えていた幕府にとって都合のいい伝説であった。シャクシャインの乱を契機に、「蝦夷が島」が、中央の知識人に注目され始めたことが、異本『義経記』の出版に拍車をかけ、江戸時代後半にかけては、蝦夷の記録とともに、現実と遊離した義経の物語が蝦夷地を舞台に描かれていった。

(6)《義経 = ジングスカン》説は、アジア民族意識と深く関わることで、「清」を「満州国」として再興した義経の後裔たちと、「白禍」米英(明治時代は「白禍」ロシア)と戦う日本とを一体化した「大東亜共栄圏」の思想と深く結びついたことが明確となった。白色人種の《黄禍論》を考察する上で、「大東亜共栄圏」の思想の見直しとともに重要な視点である。

(7)小谷部全一郎の《義経 = ジングスカン》説とは、東洋から「世界統一の君主」の出現を期待する《宮地神道》の思想と、その道を「天祐靈導」、即ち「義経の霊」が導くという《靈学》的確信とが融合した《大アジア主義》であることを明確化した。この視点も、「大東亜共栄圏」の思想の見直しに関する重要な視点である。《義経北行伝説》研究は、

現在、民衆の《判官鼻肩》による英雄伝説という観点の後退の一方で、「異国征伐の論理」「ナショナリズムに関わる政治的言説」(金)との関連を問う観点に大きく変化しているが、その論調に参画すべき問題を孕んでいることを確信した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

中村一基「《蝦夷王義経誕生》序説」(藪敏裕編『東アジア海域叢書 平泉文化の国際性と地域性』、汲古書院、2013、95頁~116頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者いはい

中村 一基 (NAKAMURA, Kazumoto)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20133895

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：